

# イチイ

牧 幸 男

「秋冷」と言う言葉は、秋のさわやかさにまじる冷ややかな感じを表現している。冬が近いことを感じるのか、未だ晩夏の気候が残っているのか、そんな境を行き来する頃であろう。この頃、イチイの生垣や庭木の濃緑色の葉の間に小さな紅い実が目立つようになる。細めの葉の間に群がるように紅い実が実る姿は、秋の風物詩であろう。私は子供の頃「種を吐き出せば毒は問題ない」と大人の言葉を信じ、この実を良く食べたものである。

イチイは、わが国全土に自生するイチイ科の雌雄異株の常緑樹で、木の高さは時に20m、径70cmに生長するものもある。樹皮は赤褐色を帯び浅い裂目が入っている。葉は極めて細く、色は新緑色、4月頃に葉腋に開く小さな薄茶の楕円形の花序を付ける。花期が短いので注意していないと気が付かないことが多い。秋には葉腋に紅色多肉質で中央に核状種子が見える実を結ぶ。この果実は熟すと甘いので、子供たちには人気がある。イチイの実を食べるとき、両親から種子は有毒なので絶対に食べないように言われたこと思い出す。



イチイの花 (撮影：松本市内)

イチイは耐陰性、耐寒性で、葉が濃い緑色、秋の紅い実の姿が好まれ、庭木や生垣によく植えられている。特に、生長が遅いこと、刈り込みに強いいため様々な形に整形することができるので需要が高い。イチイの変種きやらぼくに伽羅木やヨーロッパイチイがある。

歌題の対象になるのは明治以降が多いようだ。

あららぎの くれなみの実の 食むときは ちちはは恋し 信濃路にして 齊藤茂吉

一位の実 含みて吐きて 旅遠し 富安風生

植物名について牧野富太郎博士は「イチイの名は、一位の音読みで、昔この材からしゃく笏を作ったことから、位階の正一、従一位にちなんでこの名を付けたと言われている。また、アララギ、オンコとも言う。前者は樹容に疎蜜があるので言うのかとも思われる。語源不明。オンコはアイヌ語、漢名は一位でよく、水松すいしょうは中国産の植物の名前である。」と述べている。文献では源順編纂の『和名類聚少』(932)では栂をサクギと読ませ、この木をもって笏とするとある。『延喜式』(927)ではイチイの木で笏が作られるようになった記載がある。

「笏」の発祥は、中国の前漢(B C 206~208)の時代に著された「淮南子」(B C 179~122)に「周の武王の時代(B C 1046?~B C 1043) 殺伐とした気風を改めるため、武王が臣下の帯剣を廃し、その代わりに笏を持たしめた。」とあるのが起源と云われている。その後、中国



では5位以上の高官になると宮中に参内するとき、象牙の笏を持つことになっていた。当時の日本で威儀を正すとき、衣冠束帯に中国と同じ笏を持とうとした。しかし、当時の日本には象牙がなかったので木で代用を考えた。様々な種類の材料で試作されたが、飛騨の国大野郡のくらいやま位山から提供されたイチイの笏が素晴らしいと仁徳天皇（316～93）が採用を決定した。この時、天皇は褒賞として、この木に「正一位」と言う最高の爵位を授与されたことから「一位」と呼ばれるようになった言い伝えが残っている。



身近で使われている植物だけに、別名が多く あららぎ おんこ すほうのき 蘭 や温公、蘇芳木、赤木、山白檀、笏木、クサギ、ミネゾ、ドカ等、地域によっても様々な呼び方がある。学名はTaxus cuspidateで、属名はギリシア語で弓 taxos に由来し、英語の毒 toxin の語原となっている。種小名は「急に尖った」意から葉の形による。属名の由来は、狩や戦いの唯一の飛び道具の手段が弓を射ることであった時、イチイの木で弓を作った名残である。また、毒の語原になったのは種子に毒が含まれているからである。この毒は「ハムレット」でうたたね寝する王の耳に、叔父クロードルが小瓶の毒をたらし殺害する場面があるが、セイヨウイチイの種子から取った毒である。

薬用は、生薬名を「一位葉」（紫杉）と呼び、葉（樹皮）を利尿、通経、糖尿病に使われてきた。一時体を温めると浴用剤に利用されていた。最近、同族植物から抗がん作用が発見され、見直されている植物である。その他に葉や樹皮から得られる成分が抗癌剤のパクリタキセル（商品名タキソール）の半合成原料に使用されている。

果実は甘く、種子を除いた物を食用に、あるいは果実酒が作られる。この果実酒は「オンコ酒」と呼ばれ、美しいコハク色で、緩下、鎮咳に使われる。アイヌはこの実を好み、健康（肺や心臓の悪い人には大いに勧め食べさせた。）になると言う信仰があったらしい。しかし、種子に有毒物質を含み、死亡事故も報告されているので、取り扱いには注意が肝要である。

材質は木目が真直で、年輪の幅が緻密でくらく加工がし易いので、昔からよく使われてきた。特に、心材は光沢があって美しいだけでなく、時間の経過で木の色が少しずつ赤みを帯びてくる特徴がある。このため、様々な工芸品や机、鉛筆、天井材等に使われている。中でも、飛騨地方のイチイの一刀彫は有名である。また、この木で作った弓は、長時間弦を張っても、雨や雪に濡れても弓が緩むことがないので喜ばれてきた。

その他、材の浸出液は黒味を帯びた赤色（すおう蘇芳色）で染料に利用されている。日本人に好まれている植物だけに、岐阜県は県木として、各地域で市木、町木、村木として選定されている。イチイは周囲を浄化し、幸せをもたらすパワーがあると考えられているので神社仏閣に植えられることが多い。日光の二荒山神社の中宮祠のイチイは「勝ち運をもたらすご神木」として有名である

私はイチイを採取する方に、この葉や枝の採取は大変でないかと聞いたことがあった。その方は、イチイの木を根元から切り倒してから葉や枝を採取するので大変ではないと回答があった。

斎藤茂吉や島木赤彦などによってスタートした矢歌集団の「アララギ派」の名称は、様々な説があるが、別名のイチイの木を歌壇における一位（優位性）を暗示しての呼称としたと言われている。

花言葉は「哀しみ」「慰め」「高尚」「悲しみ」「残念」である。

